

恩智遺跡発掘調査報告

大阪府教育委員会
平成12年1月31日

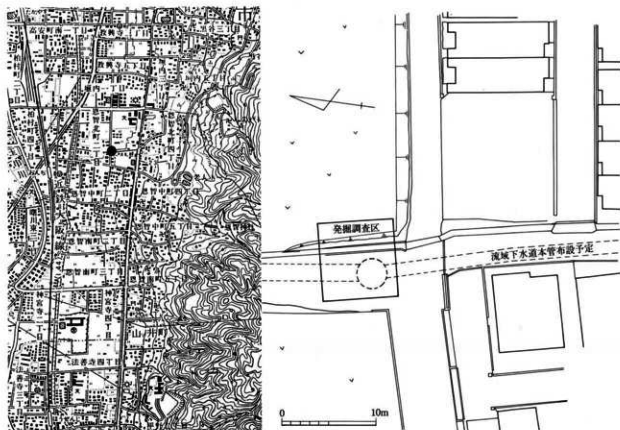
a. 調査にいたる経過

恩智遺跡は大阪平野の東部を限る生駒山地の南端寄りに形成された扇状地に立地する。1917年（大正6年）、発掘調査が行われて以来、著名な遺跡として知られてきた。また背後の山からは銅鐸2個も発見されている。しかし1939年の大阪府の調査以降長い間調査は行われていなかったが、1974年の工事に伴う緊急調査が行われて以来、行政による調査が年々増加し、遺跡の様相が徐々に明らかになってきつつあるのが現状である。遺跡は、縄文時代前期に始まり弥生時代を中心として古墳時代以降へと続く。

今回の調査は大阪府東部下水道事務所が計画した「恩智川東幹線下水管渠築造工事」に伴って実施した発掘調査である。調査は、1999年3月31～5月7日にかけて実施した。調査対象となったのは、八尾市恩智北町2・3丁目に工事予定の下水道発進立坑である。現況道路下に敷設されるため、通行の往來の確保から発掘坑の上を覆鋼板で覆い、作業を進めることになった。調査区は道路部分を主体として東の畑地の一部にも及ぶ。

b. 調査の成果

下水道発進立坑内（8m×8.4m、面積67.2m）は、ほぼ地表面となる立坑の鋼矢板天端（OP14.028m、KBM）から1.9mまでは土留め鋼材を設置するため、機械で掘削除去した後、人力による掘削を開始した。



第1図 調査位置図（1/25000・1/400）

土層で確認できたのは、OP13m下付近の灰色砂質土（層厚10cm以上）からで、下に褐色砂質土（約40cm）、淡茶褐色砂質土（20～30cm、1cm大以下の素焼き土器細片を含む）、茶褐色砂質土（約20cm、2cm大の素焼き土器細片を含む、OP12m付近）と堆積する。以上の諸層を便宜的にまとめ、第1層とする。この第1層で被覆されるのが第1面である。

第2層 第2面を覆う土層（灰色砂質土）である。黄灰色を帯びるところもある。第1層最下部の茶褐色砂質土と同質の土。上の層の下部層ともみれるが、確認できなかった。瓦器・土器器片を含む。（第2図3・44）

第3層 第3面を覆う土層で、灰白色砂質土～砂混じり微砂質土である。層上面はOP11.6mである。東播系こね鉢が出土。（4・5・47）

第4層 明緑灰色砂～砂質土、明緑灰色微砂～細砂。自然堆積層である。層上面はOP11.3～11.5mである。瓦器片（第6図21）出土。（6・7・50～54）

第5層 緑灰色粘質微砂質土。縄文土器片を少量含む。下層の第6層とは北半部でははっきりと区別できるが南東部では砂層の薄い層が確認できるだけである。また灰色～灰白色粘質砂質土と若干土質の変化がみられる。層厚20mを測り、層上面はOP11.0mである。（8）

第6層 灰色～灰白色粘質砂質黄灰色～灰色砂礫土、灰黄色粗砂。層厚8～20mを測り、層上面はOP10.8～10.88mである。（9）

第7層 黒褐色微砂質粘土で層厚20cmを測り、層上面はOP10.8mである。最上層部で縄文土器片出土。（10）

第8層 褐色粘質砂質土（細礫～細砂混じり）に第9層起源の粘土が混じる。土器片を含む。（11）

第9層 黒褐色粘土（細砂を少量含む）で、下部では2～3mm大の砂が多く混じり、下位へ漸移的に砂が多くなり、砂質土へ変化する。上部層で縄文土器を含み、下部層で弥生土器（前期？）底部片出土。（12・13）

第10層 灰白色砂混じり微砂質土～粘質微砂質土、黒褐色砂質粘質土（細礫混じり）で構成される。（14・14'）

第11層 灰褐色～灰黄色砂質土で砂礫を含む。下部では、明緑灰色微砂～細砂が全体を覆う。これは第12層上面検出の川11を流下した土石流が川を埋め尽くした後に溢れ堆積した結果とみられる。川内部は砂礫層で埋め尽くされている。（15・16・18・19）

第12層 最上部は明オリーブ灰色粘質微砂質土で、褐色粘質微砂質土が混じる。（17・20以下）

これらの土層は、第1～10層の灰色砂質土～黒褐色粘土系の土層群と第11、12層の砂礫土を主体とする土層群に分かれる。後者は扇状地形成期の産物であり、前者は沖積化の過程での堆積とみることができる。

遺構 確実に人為的な遺構として確認できたのは3面を数える。

第1面

井戸1発掘区の南東部にある。転用した樽の上に瓦9枚を円形に載せて井戸枠をつくり、さらに平面方形の外枠材で補強した構造をもつ。3m以上×3.2m以上の穴を掘りその中央に一辺約1.9m、深さ約2.4mの掘り方を設け、井戸枠を置く。

瓦質土管列2 井戸1の瓦質井戸枠西側に取りつき、西に向かって延びる。延長6m以上。土管は玉縁付きのもの（径約10cm、長さ約30m）で玉縁側を東にとり、直線状に連結させる。掘り方からは染め付けなど陶磁器類をはじめ、弥生土器・土器器・須恵器など各時期のものが出土している。井戸枠の樽材には墨書があるが、判読できなかった。井戸1・瓦質土管列2は幕末～明治にかけてのものと考えられる。

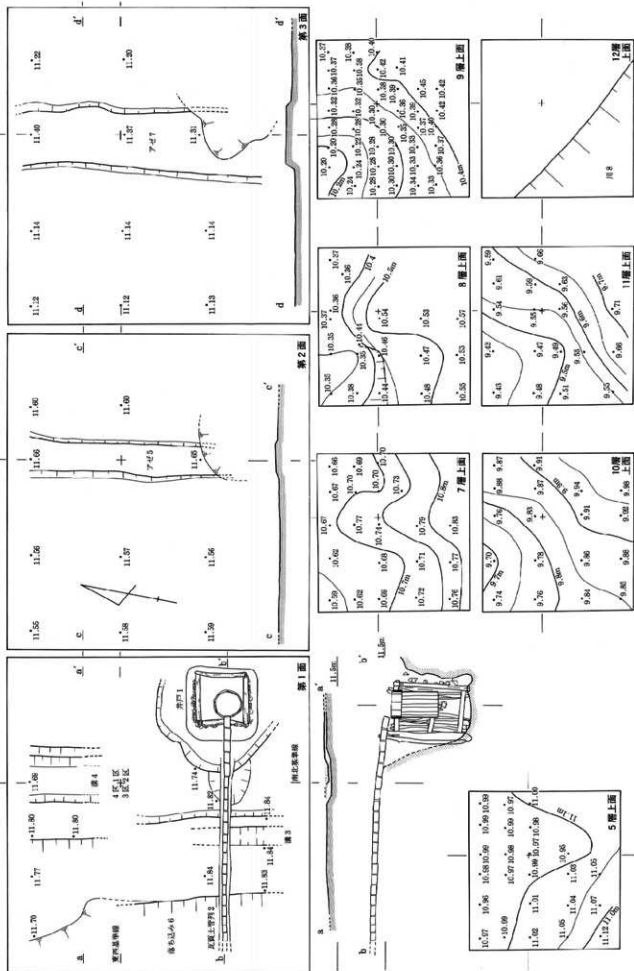
溝3 発掘区の南部中央で、南北方向に走る溝。幅0.5m以上、深さ30cm、長さ2m以上を測る。

溝4 発掘区の北部中央で、南北方向に走る溝。幅1.5m、深さ15cm、長さ1.6m以上を測る。平面的には南端まで迫れなかったが、土層断面から確実に延びることが判明した。この溝の上位にも幅1.6m以上、深さ55cm以上の溝が重複し、同様に発掘区を南北に貫く。



1. 砂岩層
2. 砂岩層
3. 砂岩層
4. 砂岩層
5. 砂岩層
6. 砂岩層
7. 砂岩層
8. 砂岩層
9. 砂岩層
10. 砂岩層
11. 砂岩層
12. 砂岩層
13. 砂岩層
14. 砂岩層
15. 砂岩層
16. 砂岩層
17. 砂岩層
18. 砂岩層
19. 砂岩層
20. 砂岩層
21. 砂岩層
22. 砂岩層
23. 砂岩層
24. 砂岩層
25. 砂岩層
26. 砂岩層
27. 砂岩層
28. 砂岩層
29. 砂岩層
30. 砂岩層
31. 砂岩層
32. 砂岩層
33. 砂岩層
34. 砂岩層
35. 砂岩層
36. 砂岩層

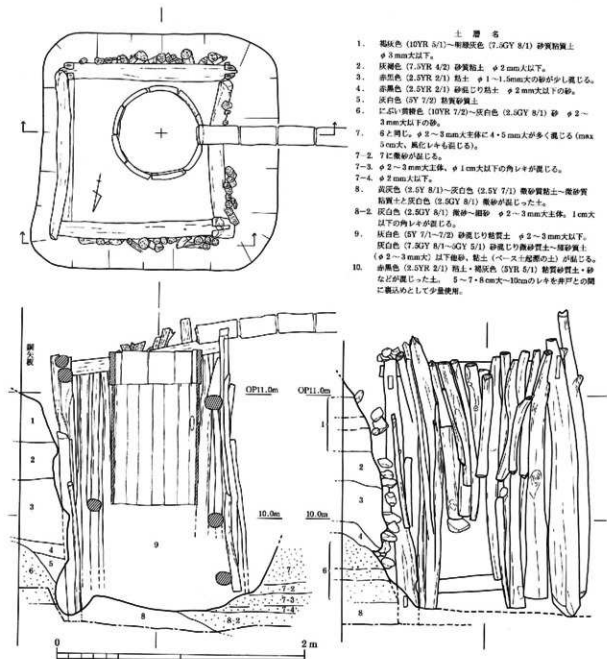
第2図 南嶺断面図 (1/40)



第3圖 縱橫圖 (1/100 · 1/200)

落ち込み6 発掘区の西部で検出された。ほぼ南北方向に落ち込み線が走る。土管列より古い。

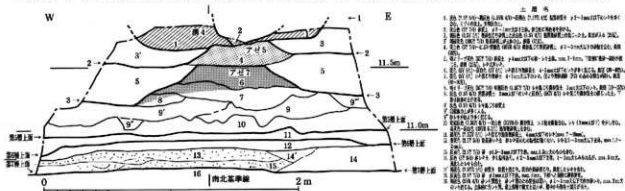
これらの遺構は層的に重複することから、大きく2時期に分かれる。西部に位置する落ち込み6と中央に南北に走る東への段でアゼを成すものと理解した。離れて東に溝が並走する。この後井戸が掘削される。井戸へは土管を西に高く、敷設して水を注ぐようにしていることから用水用の井戸とみてよい。井戸が掘削される前にアゼがつくられていたとみられ、このアゼ(幅約2mで道路とみられる)は現況の道路に踏襲されることから、土管列は暗渠と考える。常時揚水による利用をしたものではなく、早急時に備えて、あるいは畑地への用水のための貯め水としたものかと考えられる。



第4図 井戸1 (1/30)

第2面

アゼ5発掘区中央部のやや東寄りを南北に貫くアゼである。幅0.7~0.85m(上端)、1.05~1.1m(下端)、高さ15°。アゼの東西両面の高さは約OP11.6mでほぼレベルである。第1面の溝4と平面的にはほぼ重なる。



第5図 アゼ5・7断面図(1/30)

第3面

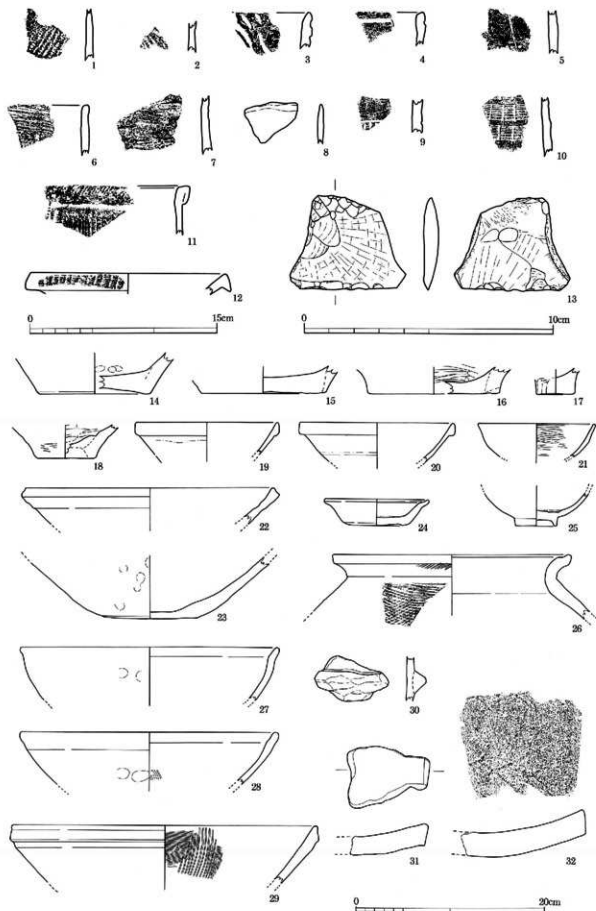
アゼ7発掘区中央部のやや東寄りを南北に貫くアゼである。幅1.6~1.9m(上端)、1.4~1.8m(下端)、高さ約20cm。上位面のアゼ4と平面的に重なる。アゼの東側の高さは約OP11.2m、西側のそれは11.11mを測り、西に低くなる。

第3面以下では、明確な遺構はなく、第12層上面で川を検出した。各層の上面での微地形について記す。

- 第5層上面 OP11.12m~10.96mを測る。全体に北に緩く下降し、中央部東で緩く谷状の傾斜を呈する。
- 第7層上面 OP10.8m~10.6mを測る。全体に北に緩く下降する。中央で北に延びる緩い尾根をつくり、東北と西北方向に緩い谷状の傾斜をつくる。
- 第8層上面 OP10.57m~10.35mを測る。中央やや東寄りに緩い尾根状を呈し、東北と西北方向に緩い谷状の傾斜をつくる。
- 第9層上面 OP10.45m~10.72mを測る。全体に北東方向に緩く下降しながら、北東部で緩い谷状の傾斜をつくる。
- 第10層上面 OP10.98m~9.7mを測る。全体に北東方向に緩く下降する。緩く谷状気味の傾斜をつくる。
- 第11層上面 OP9.71m~9.43mを測る。全体に北東方向に緩く下降しながら、北東部で緩い谷状の傾斜をつくる。
- 第12層上面 川 8 発掘区の南西部、南東隅から北西隅にかけて肩のラインが走る。西側の肩は発掘区外になるため不明。肩部の高さは、南東隅でOP9.3mを測る。灰白色系の砂(径1~4cm大以下を主体)に歪角礫~歪円礫(径5cm大以下主体、最大15cm)の混じった砂礫で埋まる。幅4.5m以上、深さ約1.3m以上を測る。

遺物(第6図)

縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁、陶磁器、瓦、瓦質土管、井戸枠の樽板材などがある。瓦質土管・井戸枠関連のものを除くと、コンテナ2箱の量である。出土層位でみると第9層の黒褐色粘土まで土器の包含が認められる。量的には、井戸1掘り方内出土がもっとも多く、他の遺構・土層出土のものがそれに次ぐ。



第6图 遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

c. まとめ

調査地周辺は、現在でも耕地の形態に方格地割がよく残る地域である。発掘区を横断する道路の位置は方格地割(糸車型地割)の環境線になる。第1面で検出した南北溝は規模からみて環境溝であり、その下位層の第2・3面のアゼも同様に環境アゼとなる。第3面のアゼは幅約1.5mもあることから道路としての役割をもったものといえる。第3層から美濃焼小皿(室町期、第6図24)が出土しており、第3面のアゼの時期を示すと考える。第9層から縄文後期土器が出土している。第9層下面で遺構は検出されなかったが、南側の扇状地の扇尖寄りの高地から流出して堆積したものとみられる。

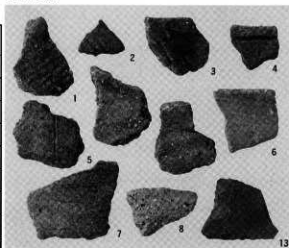
今回の調査の結果、畦畔・溝など耕地を構成する遺構の時期的な変遷を知ることができた。また少量ながら縄文・弥生土器が出土したことから、この時期の遺構が近在する可能性を示した。

調査の実施及び本書の作成にあたっては、奥村福子・白木かおり・八柄あさ代・納谷有香子・川東貴子・藤松聡美の諸氏の援助を得た。遺物写真については阿南写真工房に委託した。

恩智遺跡出土遺物 (第6図)

- 1 黒褐色砂礫質粘土 2・15 黒褐色粘土下部層 3 6面上(1区) 4・5 黒褐色粘土最上部層(3区北西、4区東部) 6・8 第5層(2区) 7 南壁断面中(3区) 9・17・25・26 井戸1堀方 10・13・14・18・20・27・28 掘削土 11 機械掘削の面から茶褐色砂質土上部層 12・29~32 機械掘削後(OP11.92mまで)に出土 16 黒褐色粘土下部層下半部 17 井戸1の堀方内 19・22茶褐色砂質土 21 第4層 23・24 第3層

出土遺物



報告書抄録							
ふりがな	おんじいせき はくつちょうさほうこく						
書名	恩智遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	1999-2						
編集者名	亀島 重剛						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府中央区大手前2丁目						
	Tel 06-6941-0351						
発行年月日	2000年1月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査理由
恩智遺跡	大阪府 八尾市 恩智北町 2・3丁目 目地内	27212 30	34 36 28	135 38 0	平成11年 3月~5月	67.2 ㎡	下水管敷 築造工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
恩智遺跡	水田・島	中世・ 近世末	井戸・ 溝・書 込み・ 大堀等	縄文土器・弥生土器・不 定形刃器・土器器・須恵 器・瓦器・白磁・陶器・瓦 瓦質土管	川(扇状地形成 期末、沖積化前 の川)		

大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-2

恩智遺跡発掘調査報告

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪府中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2000年1月

印刷 (株) 中島弘文堂印刷所